



TITLE:

花山だより(二月)

AUTHOR(S):

星見山人

CITATION:

星見山人. 花山だより(二月). 天界 1935, 15(168): 214-214

ISSUE DATE:

1935-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167000>

RIGHT:

花 山 だ よ り (二月)

昨年九月21日の大風害から丁度5箇月の二月21日に、やうやく、風害復舊工事として、官舎の大修理作業が開始された。此の工事を吾々はどれ程願を長くして待つたか知れない。官舎に宿泊してゐた人々は、狭い研究室に無理やりに寢臺を持込んで泊つてゐるし、殊に大ド1ムの眞下の研究室に居る人々等は、晴れた夜は、観測者が廻すド1ムの廻轉の轟で、ろくろく寢られぬと言ふ有り様であつた。工事さへ始めれば、あと二箇月足らずの辛棒だと、見當が付く丈でも氣やすめになる。又た、大ド1ムの亜鉛板張り工事も20日から始まつた。面白い事に花山の向ひの清水山の頂にある國有林見張所も、同じ風害で吹き拂われてゐたのが、27日から復舊工事を始めてゐる。お役所の仕事は五箇月目に、と言ふ事になるらしい。

去る1月25日21時頃、富士を背景にした三保の松原の近くに景色がよいからと言ふわけでもあるまひが、大流星が落ちた。之が調査のため柴田先生は18日より22日まで出張取調べを行はれ、立派な收穫を得て歸られ、その経路等に就いて、25日に圖書室で詳しく話された。大層参考になるお話なので、多分近く例會の席上で再び發表して頂く筈である。一年近く山に居られた是澤三郎氏は家庭の御都合上3日に歸郷せられ、又た小山先生は約一ヶ年の豫定を以て倉敷で研究せられる事になり、27日朝山本臺長と共に出發せられた。斯くて花山は急に淋しくなつたが、倉敷からは荒木健兒氏が來られる事になつて居り、又た東京に歸つてゐられる荒木九皐理學士も遠からず來台されると言ふ事だから、直ぐに又賑やかになるだらう。満四年間官舎にゐて皆なの世話をして呉れた「おばさん」は家庭の都合でやめる事になり、26日新しい「おばさん」と交代した。

4日に上海自然科學研究所員物理學科の沈璿氏、前夜から泊られた北平大學工學院電系教授馮簡氏、及び大日本俳優協會惠務理事坂東彦三郎丈の三氏が來臺。期せずして珍らしい顔合せとなつた。3日にはハワイ新聞社長相賀氏夫妻來臺。ハワイ移民50年祭を記念に、同地の近況を話された。25日に月迄15分で行くと言ふキ印氏來り、臺員を煙にまひて歸る。(星見山人)